

マガマガくんが猛き炎
にリア充自慢をするよ
うです

ムラムリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

共にナルハタタヒメを倒したマガイマガドの家族連れに、温泉で寝ぼけていたところ
でぼったり出くわしてしまったのです。

目次

マガマガくんが猛き炎にリア充自慢をす るようです	1
晴耕雨読	17
怨嗟マガド君は童貞で残念です	29
怨嗟マガド君はリア充スレイヤーを卒業 するそうです	41
マガマガくんは王様と一緒に猛き炎を探 すようです	53
マガマガくんは猛き炎に腹が立つよう です	70

マガマガくんが猛き炎にリア充自慢をするようです

諦めきれないような悲鳴を上げながらも、とうとうナルハタタヒメは地に伏した。

以前のようになどこかへと逃げ帰る事もなく、暫しの間のたうち回りながらも、その肉体からゆっくりと生気が失せていく。

そんな様子を見届けた後、しかし俺はマガイマガドは相対していた。

一時的に共闘した間柄とは言え、ハンターとモンスターという関係は変わらない。

ただ、俺を睨みつけながらも、ソイツは倒れ伏したナルハタタヒメに意識が向いており、しかも涎を垂らしているその様子に、俺は苦笑せざるを得なかった。

手持ちの物資をほぼほ使い尽くし、ナルハタタヒメもその動きにとうとう鈍りが見えてきていた頃にやって来たそのマガイマガド。

もしかしたら、俺とナルハタタヒメが共倒れになる事でも画策していたのではないかな？ とかも思う程のタイミングだったのだが、そんな事は無かったようだ。

こいつは最初から、ナルハタタヒメという馳走を食う為にやってきたのだ。

「……良いよ。俺だってもう疲れた」

ただでさえ回復薬ももう尽きているのだ。

「帰ろうか」

オトモ達にそう告げて武器を収めれば、マガイマガドは襲ってくる事も無かった。

その翌日、研究者達からの報告を受けた時。ナルハタタヒメの死体は至るところが骨まで食い荒らされていたと言う。

しかも、食われた量はマガイマガドと言えど明らかに一匹の腹に収まる量ではなく、更に同種の大小の様々な歯型があつたとか。

どうやらあの後、家族でも連れてきたらしい。

それが一週間前の事だった。

*

「あー……」

溶岩洞から少し離れた場所。隠れた温泉を見つけたのは、過去に採取に訪れていた時の偶然だ。

効能だとかは分からないが、上手いこと岩場に阻まれてモンスター達の痕跡も殆ど無いこの温泉は、長時間ダラダラと浸かっているのうってつけな、温いものだった。

ナルハタタヒメを倒した事で、ぼちぼち長い休暇も貰って。

こうして真つ昼間からぼけーつと空を眺めながら、団子やら肉やらを肴にしながら酒を飲んでいる。

……正直に言おう、もう暇で仕方がない。

「暇だなあ」

何度も何度も口に出してしまふ程だ。

……確かにギリギリの戦いではあった。マガイマガドが来ていなかったら負けていたかもしれない。

だが、マガイマガドが来てからは一気に形勢が逆転した。

当然と言えば当然である。あんな天変地異を起こすような古龍に喧嘩を売れる時点で、百竜夜行に便乗していたような個体とは別格だと分かるし、元々俺とギリギリの鏖迫り合いをしていたナルハタタヒメが、俺と同時にそんなマガイマガドも相手取るなんて出来る訳もなかった。

子を宿していたであろう腹に刃尾を食い込ませながら容赦なく食い破られ、鬼火が全身を焼き爆ぜさせる。それを振り解く間もなく俺が急所に致命を叩き込む。それは最早虐殺と言っても良いものだった。

だから俺は後に響くような大怪我もしなかったし、武器や防具を限界まですり減らすという事もしなかった。

俺もオトモも、一日も経てばクエストに赴ける体調ではあったのだ。

白い雲、青い空。

湯気がふわふわと飛んでいる。

宴で美味しい飯も酒も食い飽きた。退屈だからとクエストに出かけようとすれば止められる。

こうして外に出るのにも、装備を採取用に変えなければ許可は出なかっただろう。

それだけ、俺の事を里の皆が心配していたのだという事なのだろうけれど。マガイマガドの事もあってピンピンな状態で帰ってきたんだから、さっさとそんな心配は解いて欲しかったし、俺だって元に戻りたい。

そんな事、表立って言う事も出来なかったが。

「それにしても、あのマガイマガド……」

妻帯者なんだよなあ。

見た限りだと大した傷も付いていなかった。番も子供も居て、あの實力だと良い縄張りも持っている事だろう。

人生ならぬ、竜生満帆という訳だ。正直に、ちよつと羨ましい。

俺にも嫁さん候補は居るとは言え……いや、そういう事を考えると碌な事にならなさそうだからやめておこう。うん。

そうじゃなくて。

思う事は、やっぱりアイツ、俺とナルハタタヒメの共倒れも狙っていたんじゃないか

？　と言う事で。その位の強かさは持っていない方がおかしい。

それに考えてみると、俺があの場合から去れたのは、俺が温情を掛けたのではなくて、アイツにとつて俺を倒すより食欲の方が優先されたから、という方が合ってる。

俺がもう碌なアイテムを持っていなかった事を察していても全くおかしくないし、そもそもくたびれた俺達が二戦目でアイツに勝てたかと言うとかなり怪しい。

「本当に、美味しいところだけ持って行きやがってあのヤロウ……」

俺だつてあの状態のナルハタタヒメの素材で何が作れるのか、楽しみにしていたところあつたのにさ。

イブシマキヒコとナルハタタヒメの防具、控えめにクソ性能だったけど、あの状態のナルハタタヒメの素材こそが真価を發揮出来るんじゃないかとか少しは思ってたのに。

今度出会ったらタダじゃおかねえ……って言つても、アイツが居なかつたら俺が危なかつたのも事実な訳で。

はあ、何とも腑に落ちねえ。

*

「……ぶつぺえー！」

やべえ、寝たまま温泉の中に沈みかけてた。

まあ、起きたけど。

「うー、あー、あつ?」

気を取り直して団子でもつまもうかと思ったら、何かガルクよりちよつと大きめの、小さいマガイマガドが俺の団子を食ってる。

「おいつ、おい……」

その奥で俺の採取用の装備がでつかいマガイマガドに踏み潰されている。

今更気付いたのか、馬鹿め、というような顔。

「……」

素っ裸。装備なし。持ち物、なし。ばちやばちやと水を跳ねさせる音が後ろからも聞こえてきて振り向いたら、もう一匹のでかいマガイマガドがもう一匹の子供を抱えて温泉に入っている。その子供は俺の肉を齧っている。

逃げ場も、なし。

すっかり青褪めた俺に、俺の装備を破壊したマガイマガドが歩いてくる。

こいつ、あの時のだ。特徴は無いが、どうしてか断言出来る。家族連れでこの温泉にやって来るとか、そもそもこの場所知ってたのかよ。それとも俺を尾けてたのか?

俺の目の前まで来たそいつは、最後に啜えて持ってきたハンターナイフを俺の目の前で落として、踏み砕いた。

「……」

幸いなのは。今すぐ殺される事は無さそうだ、という事だ。

殺すつもりなら、俺はどうにこの温泉の中で臓腑もばら撒かせている。

次にそいつは俺を温泉から引きずり出して、俺の臭いを嗅ぎ始めた。

「おい、何だよつ」

そう言うも、抵抗なんて出来ない。少しでもこいつが力を加えれば、俺の体は簡単に引き裂かれるだろう。

色んな場所の臭いをくまなく、果てに股間の臭いすらも嗅いでから、そいつは顔を上げて。

凄く見下した、にやけた顔をした。

「え、あ……あ……あ？」

なまじ人と少しばかり似たような顔をしているからか。

その顔の意図が分かる。分かってしまった。

——お前、番も居ないのかよ。

……何だこの屈辱。

最後にそいつは、残っていた俺の酒瓶を啜えてぐいつと器用に飲み干すと、俺を尻尾で捕まえて温泉に入る。

深いところまで行くと、人みたいに仰向けになって、俺を腹の上に置く。

前脚で抱えられて、赤子をあやすかのようにぼんぼんと顔を叩かれた。

「……おい、放してくれよ。帰らせてくれ、頼むから」

「グルウ？」

こいつ、人の言葉分かってないか？　というか、酒に關してもそれがどういふものか分かってるよな!!　おい、その番のマガイマガド、俺を憐れむ顔で見るんじゃない!

というか、これ絶対に俺をペットみたいに扱ってるよな。そうだよな？

俺が一から十まで悪いんだけどさ、そうだけどさあ!

俺の肉と団子を食い終えたマガイマガドの子供の二匹が泳いでこっちにやって来る。

「ギヤウギヤウ！」

「ゴルルウ！」

父ちゃん、こいつ何？　食っていい？

絶対そんな事言ってる。

「グルウ……」

恐る恐るその父親を見れば、目が合った。

案の定と言うべきか、どうしようかなあ？　と意地の悪い顔をしている。

「えーつと……何をすれば良いでしょうか」

そう言えば、マガイマガドは悩むように頭を上げる。

「おい、お前やつば人の言葉分かつてるだろ！」

それで？ というように前脚の指で頭を抑えつけられる。

ばしやばしや。

泳いでくる音。

「あつづう！」

子供の一匹が待ちきれないように俺の足を噛んだ。

容赦なく痛い、つていうか食い千切られる！

「ゴルルアー！」

その途端、父親が吼える。子供は途端に退散していった。

ただ。

その後俺を見る目は、助けてやったんだからな？ という、やはり上から見る目で。

「仕組んでいたんじゃねえだろうな……？」

そいつは何も答えなかった。

足からだらだらと血が流れる。回復薬の一つでもあればすぐに治るんだが、それらはこいつが装備と一緒に潰していたし、その代わりにこいつがやった事と言えば、温泉から出して舐める事だった。

何だろうなこいつ。ハンターが死んだら狙われる事まで分かつてんのか？ 子持ち

の今はそこまでして殺すメリットも無いと？

良く分からんが、少なくとも俺を生かしておく事にメリットがあると思ってるのは確かだ。

それでも……そのでかくてザラザラとした舌でべろり、べろりと舐められるのは正直気味が悪い。

顔には出せないから、空を眺めている事にする。

……何でこんな事になっちゃったんだろうな。俺が悪いんだけどさ。だって、他の竜の痕跡なんて無かったもの。俺が見逃してただけだったかもしれないけどさあ。

血が止まったのか、マガイマガドは舐めるのをやめて、それから尻尾で酒瓶を俺の前に持ってきた。

「……また持って来いと？」

「グルル」

逆らったら、分かっているよな？

牙を見せつける顔は、そんな事を言ってるに違いない。

逆らわなかったとしても、子持ちのお前が逆恨みで危険を冒す事も無いんじゃないか？ ……いや、こいつなら痕跡を残さずに面倒臭い嫌がらせを幾つでもやってきそう

だ。

「……分かったよ。一回だけだぞ、一回だけ、な。早い内に、ここに置いておくからさ」
不服そうな顔で、けれどマガイマガドは頷いた。

血が固まれば、俺を噛まなかった方の子供のマガイマガドが近寄ってくる。

「……何だよ」

番のマガイマガドは俺を睨みつけてるし。この足じや逃げる事はおろか、歩く事もままならねえし。生きた心地がしねえ。

「グウ」

目の前に小さい刃尾を突きつけられる。それには団子の串が挟まれている。

「俺は便利屋じゃねえんだぞ……」

悪態を吐きながらも、今の俺には受け取るしか選択肢がない。

父親のマガイマガドはそんな俺を相変わらずニヤニヤとしながら見てるし。俺の失態で酒が美味いつてか？ バカヤロウ。

結局。俺は痛む足を引きずって、温泉に浸かるそのマガイマガドの隣に座り直した。

おや、と見られるが、馬鹿にされながらも、隅で寂しく座ってニヤニヤ見られているよりは、こいつに話しかけていた方がよっぽどマシだ。

「で？ あの古龍、ナルハタタヒメって言うんだけどさ。アイツは美味かったのかよ」

「グウウ……」

思わずごくくりと喉を鳴らしていた。それ程だつたらしい。

「お前がいつから居たのか俺は知らないけどさ、あの古龍、元々あそこまで強くなかったんだぞ」

ほう？ と、耳を傾ける。

「あいつは雌で、雄の番が居ただけだよ。」

近くに干からびた雄の死体もあつただろう？ 似たような形をした、青色の」

そう言えば、何とも言えないような顔をして。

「アイツ、役に立たなくなった雄の首に噛み付いて、その全部を奪い尽くすかのように吸い取つたんだよ」

おうおう。今の顔を見られないように番の方を見ないようにしている。

……一矢報いてやった。

そう内心で笑っていれば。

次にソイツは刃尾を動かしたと思えば俺の股間に当てて、俺を見てきた。その顔は脅迫とかではなくて。

——それをちゃんと使った事も無いお前の方がソイツより下じゃねえのか？

「……………」

何で俺はこいつの言いたい事をここまで理解出来ちまうんだ。

「グルルウ？」

言い返せないのか？ そうだよ、クソが！

それから暫く後。

そのマガイマガドはばしやあと温泉から出て、唐突に俺を尻尾で巻きつけながら外へと出た。

どうやら、先に俺だけ送り返すようだった。……素っ裸で。

「せめて装備の布くらいはっ」

うるせえ、と言うようにいきなり走り始めた。

どどどどどつ。

速い！ 景色が霞んで見える！

ただ、そんな驚きも一瞬で吐き気変わる。

俺の事など最低限しか気にしておらず。乗り心地と言うか、なんというべきか。それは言うまでもなく最悪で、吐いてこの尻尾を汚したら即座に殺されると思うと必死で口を抑えるしかない。

しかも途中、ラングロトラやりオレウスとすれ違うと、何だあいつ？ という目で見てきたのだけは不思議と分かった、というか意図的に速度落としやがって、羞恥心も酷かった。

しかもベースキャンプの近くまでやって来れば、今度は目の前にラージャン。

「ゴアアアアッ！」

マガイマガドを見るなり戦闘態勢に入ったラージャン。マガイマガドも応じて、ボボッと全身に一瞬で鬼火が滾る。当然俺を抱えている尻尾にも。

「え、おい!？」

その瞬間、俺は空高くに放り出されていた。

「……は？」

ラージャンの目も真つ裸の俺に釘付けになり。ぽかんと口を開けている。

その次の瞬間。ボンッ！ とマガイマガドの背後で鬼火が爆ぜて、更にマガイマガドが加速し、ラージャンを突き飛ばす。ラージャンがごろごろと転がりながらも体勢を整えた時には。

マガイマガドは既に刃尾を槍のように突き出して、その首を貫いていた。

そして、放り投げた俺を啜えて回収する。

「マジかよ……」

せめてきちんと装備を整えて挑めれば、五分五分くらいだろうと思っていたんだけど
な……。

確実に俺より強いじゃねえか。

そうして俺をベースキャンプまで送り届ければ、殺したラージヤンを見せつけながら、分かっているよな？ という顔をしてきて。

「……………いつ、どこに持っていけば良い？」

俺は裸のままにマガイマガドの言いなりになりながら、最後にラージヤンをそのまま晩飯として持って帰るマガイマガドを見届けるしか出来なかった。

「……………はあ」

素っ裸で、べつたりと涎塗れになった全身。

休暇、本当に要らなかったよ。

本当に。本当に！

*

月が空高く登る頃。行きとは違う格好で帰ってきた狩人は、どうしたのかと聞かれてこう返した。

「酷いリア充自慢にあった」

げっそりとした顔で答える彼の真意を知るのは、その全身にマガイマガドの臭いがたっぷりと残っている事を察したオトモ達だけだった。

そしてまた、その日からどうしてか彼女を作ろうと躍起になり始めたカムラの猛き炎は、やる事成す事が残念で。

何だかんだでひっそりと交流の続けさせられる事になるマガイマガドに、会う度に鼻で笑われるのであった。

晴耕雨読

大社跡よりも更に山を幾つも越えた先。そこから大きな崖を挟んで、更にその先。人の手が未だ及んだ事のないであろう、未開の地。

ばらばらと雨が降っている、静かな時間。

その岩肌の崖の下。そこには竹を組んだ雨避けの下で、一人の男が本を読んでいた。

丁度老け始めた頃の年齢。痩せぎすではあり、古びた衣服を着ているばかりのその男は、狩人ではないようだった。

男の両脇には行李が幾つか。そして目の前には小規模ながらも、しっかりと手入れされた畑が。

最寄りの集落からも、道など無い。ここに至るまでの崖は、飛行船か、はたまた大翔蟲を使わなければ飛び越えられないようだが、そのどちらも無い。

そもそも、竜はおろか、イズチやジャグラスからの自衛も怪しい、その痩せぎすの肉体。

ぺら、と本のページをめくると、そこで目を見張る。

「……………」

その本は、昨今のカムラの里で起きた出来事を纏めたものであった。

百竜夜行の原因かと思われていたマガイマガドと言う名の竜を、猛き炎と呼ばれる狩人が討伐した事。だが、それでも百竜夜行は沈静化しなかつた事がそのページには書かれていた。

「……………」

ページをめくれば、その元凶はイブシマキヒコとナルハタタヒメという二体の古龍が元凶であり、それも猛き炎によって討伐されたと書かれていた。

それはつい最近の事。

この男がその足で人里まで降りて、そしてこの地に戻って来れるとしても、それに要する日数の内の事。

ぼんつ、ぼんつ、と遠くから何か爆発するような音がした。

続けて駆けて来る足音は紛れもなく巨大な竜のもので、しかし男は動じない。

そして、やって来たのはマガイマガド。

平均的な個体よりも一回りは大きく、腕刃や刃尾、そして立派な角には刃毀れや欠損など微塵も見られない。

古龍でさえも堂々と返り討ちにしてみせるであろうその様相。

そんなマガイマガドに、男は「お疲れ様です」と言う。

「グルウ」

マガイマガドも、素っ気なく返した。

元は商人であつたその男は、ある時竜車を駆つて売り物を狩人の護衛と共に運んでいたところを、数匹の竜に襲われた。

今思うと、百竜夜行も関係していたのだろう。明らかに尋常じゃない様子の竜達に護衛の狩人達も次々と屠られていき、しかし最後に生き残つたその男に牙が届こうとした瞬間、その脳天から顎下にまで、その刃尾が貫いていた。

それから瞬く間に全ての竜を屠つたそのマガイマガドは、その男に興味を示す事もなく竜達を骨ごと食つていたが、崩れた竜車から段々と良い匂いが漂つてくるのに気付いて、そちらに向かう。

マガイマガドはそんな荷物を物色し、初めての匂いや味に舌鼓を打ち。

その後も満腹になるまで竜達を食り食つた後に、未だに腰が抜けて動けないままのその男も捕まえて、役に立つかもしれないと連れ去つたのだつた。

マガイマガドの中でも強者であつたその個が持つ縄張りは広大で、生きる事そのものに余裕も溢れている。

そして、その男も拾つた命だ、と開き直つてその縄張りの中で余裕を持つマガイマガドの興味を満たしながら悠々と暮らし始めた。

マガイマガドは酒の味を知って、また拙いながらも酒を作る事も出来る男に連れてきたのは正解だったと内心頷き。

男はマガイマガドと言う竜に段々と恐れを抱かなくなっていき。

マガイマガドは気付けば人の言葉を理解出来るようになっており。

男は百竜夜行の原因がマガイマガドではない、マガイマガドはそれを利用していただけだと誰よりも先に知り。

どうしても欲しいものがあるとねだられて、一度人里近くまで連れていけば、その足でさっさと用事を済ませて戻ってきた男に驚いて。

頭脳を使う盤上の遊戯を教えてみれば、想像以上に嵌り、今となつては五分五分の戦いが出来る程にまで賢くなつて。

久々に番を設けてお前はどうかんだと聞いてみれば。

親が不仲で、とぼちちりを受けた自分は親になるつもりはないのですと答えた。

そうして、気付けば共に生きてもう十年も過ぎていたのだった。

「カムラの里の近くのマガイマガドが討伐されたらしいです」

そう言うともマガイマガドは、ああ……と空を眺めた。

知つていながら、そう悲しげではないその様子。血縁関係ではあるが、別に大した奴ではない、位だろうか。

それから、読んでいる本に顔を近付けてきた。

「グルルツ？」

「この本ですか？ そのカムラの里で起きていた百竜夜行に関しての顛末が纏められているんですよ。」

最終的に、イブシマキヒコとナルハタタヒメという二匹の古龍の逢瀬が元凶だったとか」

ぺらぺらとページをめくると、百竜夜行に連ねた竜達の絵から、マガイマガド、そしてその二匹の古龍の絵が記されていて。

その絵を見るなり、じゅるりとマガイマガドは唾を飲んだ。

そんな様子に、疑問を持ち、ふとそのページの文章を眺めると。

猛き炎とナルハタタヒメの決戦の最中、マガイマガドが乱入してきた事が記されていた。

加えて、猛き炎がナルハタタヒメを討伐してから、調査隊が着くまでの間に、そのナルハタタヒメはかなり食されていたと。

「……食べたのですか」

そう聞けば、美味かつたぞ、と腹を撫でた。

程なくして、その番と二匹の子がやって来る。番の方はその男に関心がそう無いよう

であるが、二匹の子はもう既に男に多少なりとも懐いていた。

竹とんぼを飛ばしてやれば、ふわふわと飛んでいくそれを必死に追い掛けるわ、起き上がり小法師を何度も倒そうとして最終的に壊してみせるわと好奇心旺盛で、人里から珍しいものを持つてくればすぐさま漁ろうとしてくる。

「じゃあ、その猛き炎とも会ったのですか？　どんな人だったんでしよう」

そう聞くと、どうしてかマガイマガドは顔を崩した。まるで嘲笑するかのよう。

「……弱かったのですか？」

そう聞けば、いや、と首を振って。

「グルウ」

何か含みのあるように喉を鳴らした。

「…………？」

弱くはない。ただ、何か馬鹿に出来るような奴。そんな印象らしい。

それより、とマガイマガドは尾の先で一つの行李を指す。その中には遊技盤があった。

「そうですね、やりましょうか」

そう言つて、男はその行李を開いて駒を並べ始めた。

雨も気付けば止んでいた。

遊技盤は、通常のものよりやや大きめではあるが、それでもマガイマガドにとつては小さい事には変わりない。

けれど、もう何年も指し続けて来た間柄だ。爪先で僅かに駒を動かすのには、慣れた手付きだった。

男が最初にしっかりと型を組むのに対して、マガイマガドは急襲を好む。

興味が湧いてからは色々と型を教えるはみたものの、最終的には自己流でパチパチと打つようになっていた。

ただ、その打ち方は沢山の罠が仕掛けてあつて、時にこちらの攻めを誘発させて逆に致命傷を与えてきたりもする、油断も隙もあつたものじゃない。端的に言えば、ネチネチとしていると言うか、性格が悪いと言うか。

多分……マガイマガドという種そのものがそういう傾向にあるのだろうと男は思つていた。

序盤、今日は日もまだ登りきつてないし、ゆっくりと組んでみようかと守り主体の陣形を固めようとしたところを、マガイマガドは一気に攻勢に出てくる。

顔を上げれば、そんなつまらん事すんなよ、と言うように不満気な顔で、若干無謀でもあるような攻めをしてくる。

尻尾では二匹の子をあやししながら。

……そういう表情も囀に使ってくる事もありましたよね。

一見すれば、冷静に対処すれば良いはずだ。ただ、ここでミスをするると一気に傾きそうな気もする。

「なるようになりますか」

負けたって死にはしない。それが遊戯の良いところだ。

半ば勘に任せて駒を動かせば、マガイマガドは長考に入った。どうやら、無謀をしているのは当たりだったようだ。

尻尾の動きが止まると、後ろから不満の声が聞こえて、はいはいと動かして。蹴鞠を引き出してきて投げつけてやれば、興味はそっちに移った。

それから程なく、マガイマガドが次の一手を打つ。

また意図が分かりかねる一手で、どう打とうとも泥沼になりそうな予感がした。

*

もう日もすっかり暮れる頃には局の終盤、流石に見辛くなってきた盤上に対して火を起こそうとすれば、そんな水を差すような時間を入れるなどいわんばかりに、マガイマガドは尻尾の先を盤の近くまで持つてきて、鬼火を点けた。

時に自らの背後で弾けさせて、その反動で空中で更なる跳躍をする事も可能とするその炎は見るからに恐ろしげな紫色であり、また歪な揺らめきを見せている。

だが、このマガイマガドの縄張りで庇護されながら生きてきた男にとっては、それは警戒するものどころか、ただの火よりも安心出来るものだった。

それもあつてか時折人里に降りて貴重な植物やらを売り、物を買ってきてはいる時には、ガルクやアイルーから恐ろしい臭いが染み付いていると言わんばかりに奇異の目で見られてしまう。その臭いがまさか、マガイマガドのものだとは思つてもないのだからうけれど。

盤上は混沌を極めているが、どちらの牙も喉元に差し掛かっている。一手間違えればもう詰んでしまうだろう。自ずと考える時間もそれぞれ増えていくが、こんな夜にまだまた訳の分からない事を続けて、と番には呆れられ、子供はとうに寝てしまっていた。

番を設けてからはこういう事をする機会も自然と減つていたのもあり、久々の遊戯には熱中が収まる気配もない。さっさと終わらせようなどとは思つてもいなかった。

男は喉の乾きと空腹を強く覚えていたのを、マガイマガドは強く全身が凝っているのを自覚しながらそれを無視して、互いに唸り声を何度も響かせながら。

そして月が高くにまで登る頃。

乱雑に思わせながら、序盤から数多の布石を仕込んでいたマガイマガドの狡猾な攻めを凌ぎきつたと思つたら、最後の最後で自らの手で詰みに誘い込まれてしまい、男が負けを認めた。

「……負けました」

そう男が言った途端、互いの姿勢は一気に崩れた。

「はー……」

どこから作戦で、どこからアドリブだったのか。前回勝ったからか、もしかしたらずつと考えていたのかもしれない。執念深いのも、マガイマガドにとつてはある程度似通った性格らしいから。

男が夜空をぼうつと眺めていれば、ごき、ごきんつ、とマガイマガドが関節を盛大に鳴らす音が聞こえてくる。それから、満足気に喉を鳴らす声。

身を崩していたのも束の間、マガイマガドは体を起こして背伸びをして。ほら起きろと言うように男を突く。

熱中すると飲食すら放置してしまうその男は、放っておくと偶に今よりも痩せこけて見るからに不健康な体で、それでも目だけをギラギラさせて物事に取り組んでいるという事があつた。

そんな小さい体にそうエネルギーを貯められる訳でもないだろうに、まあ、きつとそんな熱中が人を人たらしめているのだらうとも思ったりもするが。

それよりも重要なのは、病気にでもなつたらどうするんだという事で。

「豆も成つただらう？」と畑を指す。

「今から、ですか」

面倒そうに言いながらも男は渋々と従い、遊技盤をしまった後で、飛ばされた鬼火を明かりにしてゆつくりと収穫し始める。

塩茹ですれば酒にとても合うその豆は、男がここで栽培する程に好きなものだったが、マガイマガドも食してみれば気に入るものだった。

そしてその間に、仄かに甘い匂いのする、一際大きい行李を引き出して、蓋を取る。その中には酒瓶と、珍味が詰まっていた。

「……」

良い、匂いだ。

どちらも巨体のマガイマガドにとっては極々少量で腹を満たすには全く足りないものではあるが、純粹に舌を楽しませる為だけの飯は全く別の楽しみを与えてくれるものだった。

豆を両手に抱えて戻ってきた男は、鍋に貯めていた雨水を入れて、それから塩も入れて、火にかける。

遠くから、ジンオウガの遠吠えが小さく届いてきた。

空を見上げれば、月がまんまるに輝いている。

そのジンオウガはマガイマガドの縄張りの近くで、老齢ながらも未だ他の竜からも慕

われている、強い個だ。

その遠吠えはこの山脈一帯に響き渡る程に長く、透き通ったもので。

また、空を見上げれば、月がまんまるに輝いていた。

「良い夜ですね」

「グウウ」

特に、俺はな。勝つたし。

そんな含みを持つ唸り声に悔しがりながらも、男は豆を湯から上げて、皮を剥いた。

「あつつ。でも……うん、美味しい」

マガイマガドもそれを皮ごと口に含み。

それから行李を男に押し寄せた。

また新しいものもあるだろうか？

「はいはい、ありますよ」

男は答えながら、既に前脚と尾を使って器用に酒の蓋を開けているマガイマガドに、少しばかり微笑んだ。

怨嗟マガド君は童貞で残念です

……同じ臭いがする者は、狩人であろうと、竜であろうとも見逃してきた。

若い頃、角の一本と片目を切られただけで、もうそれ以降雌から見向きもされなくなつた我と同じような。

どれだけこの身を鍛えようともただそれだけで、もう我には命を繋ぐ事は出来なくなつたのだと理解させられた我と同じような。

そういう輩は見逃してきた。

そう。我が潰すのは、リア充だけである。

やつてきた狩人は、今まで返り討ちにしてきたどの竜よりも、古龍ですらも上回る。

だが、残念な童貞の臭いも、今までの何よりも強かつた。

鬼火を収めてみれば。

狩人も武器を収めて、何故か一度帰り。

程なくして子猫も子犬も置いて、一人で再びやつてきて、そして我の目の前でどすんと座つた。

「なあ……あんた……俺と同じだよなあ？」

……そうだな。

「言葉も通じるのか」

童貞を見逃してたら覚えていたな。

「なるほど。なるほどなるほど……」

こつちも、身振りだけで伝わるもんなんだな。

そう思っていれば、うんうんと頷く狩人は、座ったまま俯くと、ぽつり、ぽつりと喋り始めた。

「……頑張ったんだよ？ 俺。

元凶だと思われていたメル・ゼナを倒しました。

何か知らんがやってきたシャガルマガラも倒しました。

真の元凶たるガイアデルムも倒しました。

何かまたやってきた、あんのクソ迷惑カマキリカップルも倒しました。

いつでも勝手にブチギレてる激昂ラージヤンも倒しました。

体内器官が暴走して暴れてるばかりのバルフアルクも倒しました。

そうじゃなかったら救世主だとか言われなもんね！

でもさ、お茶に誘おうとするだけでも、『すまない、その日は用事があるんだ』とかばかり言われるの。

その気持ち、お前になら分かるよねえ、分かるよねえ!」
持ってきた瓶の中身を、ぐいと飲む。

「すまない、君の事はとても尊敬しているのだが……とてもすまない、男としての魅力は感じないんだ」とか、『ごめんなさい、猛き炎。貴方と一緒に居る未来が、どうしても思い浮かばないのです』とかさあ、それが英雄に言う事かよお!

う、う、う、うわーん!!」

拳句の果てに我の前脚に抱きついて泣き始めた。

「……………」

すまない。我にでも、お前に番が出来ない理由は分かる。

「うる、ぜえ!!」

きつたねえ顔。

それで、我がここに来た理由なのだがな。

ここらにも、貴様にも、幸福な同胞の臭いが染み付いている。

「……………え、ああ? アイツ? 強いよ。とても。

あんたも相当みただけどさ、うん、そうだな、多分ダメだな」

……通じるんだな。軽い身振りだけで。

それで、アイツとは?

「俺が童貞だからって言って馬鹿にしてくる、あんたと同じマガイマガドで、妻子持ち。」

いや、待て待て待て待て。言っただろ、強いって。

それに俺な……少し助けられてるんだよ、アイツに。それ以上に色々使われてるんだけどな！

いやいや、それとは違うんだけど、うん、なんだ。

俺とお前、戦ったとして、きつとどっちもタダじゃ済まないだろう？

その程度じゃ、お前、アイツには負けるよ。

俺、アイツに未だ勝てる気しねえもん。

妻子持ちに負けて死ぬとか嫌だろう？」

……詳しく聞かせろ。

「……アイツ、竜に対して二撃以上振るっているところを見た事がねえんだよ」
……は？

「まず、俺が見たのは、ラージャンを出会い頭に、首を貫いたところだったな。」

次にオロミドロ。泥の中に突き刺したと思ったら、脳天を貫いて引き摺り出してきやがった。

それからバゼルギウス。空中で揉み合った上で、地面に頭から叩き落としてたな。

「ぜーんぶ、一撃必殺。そんな事出来るか？」

「……全部、弱かったんだろう？」

「いやいや。最近だと、俺がバルファルクと戦ってる時に、唐突に現れたかと思つたら胸に刃尾を突き刺して、さっくり殺すとそのまま持つて帰りやがった。」

「バルファルクだぞ？　古龍だぞ？　俺が結構長い時間戦つていたとはいえ、まだまだ

元気だった奴をだぞ？」

「だから……俺はあいつには逆らわないうって決めてるんだ、もう」

「バルファルクって、あの天慧龍の事だよな？　あの細い体をした、何よりも速く空を

飛ぶ古龍だよな？」

「我が見た時は自我すら失つてとにかく暴れ回っている奴で、我でさえも近寄りたくないとかわせる奴だった……。」

「……世の中とは、世知辛いな。」

「持つてる奴は何だつて持つている。」

「お前だつて分かつていた事だろ？」

「いや……いや、そうだな。」

「……で？　お前、どうすんの？」

「お前がきつと、俺の故郷を過去壊滅させかけたマガイマガドつてことは大体察せられ

るんだけどさ。

まあ……俺がまだ生まれてない頃の話だし、俺はお前にそこまで恨みを持ってない。それに、同じ強い童貞だしな！」

ぶつ倒すぞ。

「だがな。ここに居たらお前を討伐せざるを得なくなるぞ。

現に、近い内に、その時のお前の角を斬り飛ばしたウチの里長が来てしまいうらしいし、流石に里長を単独で行かせるくらいなら、共にお前を討伐するよ、俺は。

どうする？

ここに留まって、俺と、お前の角と片目を斬り飛ばした奴と二対一で戦って死ぬか、それともここから去るか。

実力を弁えてるなら、さっさと帰りな」

本っ当に苛立つ事を言うな、こいつは。

そもそも、我に縄張りなんて無えんだよ、帰る場所なんて無えし。

「それに、俺も言える事じゃないだけどさあ。叶わない物事に固執しちまつてる時点で負け組なんだよな。

お前、負けて死ぬまでリア充を潰して生きるつもり？ あのリア充マガドより弱い時点で、いつか負ける時は来るぞ。

その時、俺の一生は満足出来るものだったって思える訳？」
う……………うぐ……………。

「ほらほら。そんな怨みたつぷりなナリして、そこで考える位の頭も持つてんだろ、お前。

そういう最期を迎えたくなかつたら、帰る場所がなくとも今日はどっか行つておけ。適当に誤魔化しておくからさ」

*

*

キュリアに毒された……………傀異化した個体を狩る日々が今日も今日とて続く。

カムラの里の方にもその羽を伸ばしやがって、学者さん達が言うには、これでも数は減つてきている方だと言うが。

せめて、新しいメル・ゼナがやってきて来んねえかな。あいつが居ればキュリアもこれらのモンスターに好き勝手に寄生する事はねえだろ。

つて思つてたら本来に来た。

「メル・ゼナが来てから傀異化もすっかり収まった事だし、メル・ゼナ自身もそう暴れてるわけでもないし、討伐はなしで良くない？」

俺がそう言うのと、それでも観察はしてきてくれと言われて、はいはいと答える。

「……私の同行は必要だろうか？」

「いや、いいよ。俺と二人きりになりたくないでしょ」

「それは……」

……否定してくれよ。

「で、はい。あの童貞と遭遇したと」

赴いてみれば、刃尾と三叉尾を金属質な音を立てながら剣戟のように打ち合った後、メル・ゼナのブレスに正面から耐えて、鬼火の大爆発を起こし、痛み分け。

まあ、古龍と相打ちにするくらいの実力は持つてるんだよな、あの童貞。

それなのに角を切られただけで雌から見向きもされなくなるとか、雌の目も狂ってんじゃねえかな。

メル・ゼナも手強い奴だと認識したのか、一度退却しようとして翼を開いて飛び立つ。

逃すものかと、その童貞マガドが追撃しようとして、足を止めた。

「あつ……」

メル・ゼナがそんな童貞マガドの様子に警戒したその瞬間。

上から飛び掛かったもう一体の、俺を馬鹿にしてくるリア充マガドが、その首に噛みつき、地面に叩き伏せ、何もさせない内に首を引きちぎった。

飛び立っていくキュリア達。

「殺さないでくれよ……」

俺は膝から崩れ落ちた。

マガイマガドの二匹は、そんなキュリアになぞ興味を持たず、互いを認識する。そもそもキュリアが寄生しようとするれば、どこに噛みつこうともすぐさま鬼火で爆散させられていく。

そして、その二匹はいがみ合うかと思えば、どうにも見知った顔なのか、互いの顔をじーつと見たり、臭いを嗅いだり。

……どうやら、親族らしい。

「……要するに、この兄を超えたくて早くに親元を離れて、力を手っ取り早く付けたくて、過去のカムラの里で起きた百竜夜行に乗じたところ、片方の角と目を切られた、と。なるほどね……」

お前、短絡的な行動が全部裏目に出てるんじゃないやねえの？」
うるせえ！ と吠えられる。

それにしても……順風満帆に成長して、通常個体のまま、この特殊個体にまで成った弟をも凌いだ実力を持ち、そして家族をこきえている兄かあ。

きつと小さい頃から優秀で、それがコンプレックスで仕方なかったんだらうか。

「で、兄からしたら、何十年ぶりに会った弟はどうなんでしょうか」

すると、じろじろと見た挙句。

『身の丈に合わない力を持つても、その身を滅ぼすだけだぞ』

そう端的に告げると、弟は再びうるせえ！ と吠えてから、メル・ゼナの足の一本を食い千切つてどこかへと去っていった。

「あーあ」

あいつ、この兄を超えられる事は多分無いな。

『生きてるとは思わなかったな、あいつ……』

聞けば、まだガルク位の大きさの頃に飛び出したんだとか。

「お前がいじめたたんじゃねえの？」

『……………』

おいおい、否定しねえぞ、こいつ。

でもまあ、こいつがやりそうな事は、直接いじめるとかじゃなくて、ひたすらにマウントを取るような事だろうなあ。

お前まだ鬼火を使つて二段ジャンプ出来ねえの？ とか、そんな感じの。

いや、より陰湿だわ、それ。手を出してない分、親からしても何も分からないだろうし。

「あ、そういうば、お前、メル・ゼナ殺さないで欲しかったよお……」

は？　と言うようにこつちに顔を向けてくるマガイマガド。

事情を話せば、少しばかり済まなかったと言うような顔を向けてくる。

「傀異クエスト、もう行きたくないんだよ。無駄に硬いしさあ、一撃一撃が重いから油断も出来ないしさあ。」

なあ、お前、一緒に来てくれない？　メル・ゼナが生きてりやもう行かずに済んだんだからさあ」

やなことだと、メル・ゼナの美味そうな部分だけを引き千切って持って帰ろうと準備をするのに対して。

「せめて、そつちで出た傀異化した竜はそつちで後始末してくれよ」

それに関しては尻尾を振って分かった分かったと言うように答えて、ポンツ、ポンツと鬼火を爆ぜさせながら帰っていった。

後に残ったのは、大して剥ぎ取る場所の残っていない、メル・ゼナの死体。

「……来た時期が悪かったな、お前」

尻尾だけ剥ぎ取っておこう。

*

寒冷群島。

今日は傀異化したベリオロスが相手、と聞いてきたのだが。

「何で居んのお前」

ベースキャンプのすぐ近くに、その童貞マガドが陣取っていた。

『兄が、傀異化した竜には、俺でも多少手こずるとか言ってたな。』

それなら、我がさっくり倒せれば兄を超えられるって事だよな？

その証人になって欲しい』

「え、あ、ああ」

おい。

キュリアに支配された竜と、キュリアを支配する古龍のどっちが強いと思ってるんだ？

お前、騙されてるよ。

……でもまあ、俺ももう戦うの面倒だし。

「じゃあ、頑張つてこいよー」

そう言うと、元気にベリオロスへと戦いにいく。何の疑いもせず。

あいつがモテないのも、結局、あいつが残念だからだ。

うん、俺と同類だわ。

南無南無。

怨嗟マガド君はリア充スレイヤーを卒業するそうです

塔。

端的な名で呼ばれるそのフィールドは、今でも未知で覆い尽くされている古代技術を駆使して作り上げられた、天をも貫く程の高さを誇る建造物の周囲一帯である。

エルガドからやや遠くにあるその地域に、金銀火竜が訪れたという報告が入って来た。

朽ちてもなお、崩れるような気配を一切見せないその塔には、強力な竜や古龍が縄張りしようとして来る事は珍しくない。

人里からは遠く離れており、そう気性が荒くなければ討伐まで決定される事はなかった……が、今回に関しては色々と微妙だった。

*

襲いかかつて来た鋼龍の竜巻を掻い潜りながら、金火竜はその頭を尾で引つ叩いた。

「ギヤアツ!？」

弾き飛ばされ、起き上がった所に更に一発。

「グウツ!? グ、ゲボツ」

猛毒の染み込んだ尾の棘。それが数本、鋼の鱗すらも貫いて鋼龍の頭に突き刺さっていた。

毒に犯され、口から血を吐く鋼龍。元々毒を不得手とする古龍だ、身に纏っていた暴風も弱まってしまふ。

そこへと金火竜は容赦なく青い火球で追撃し、再びダウンさせると、前後不覚に陥ったその鋼龍の目の前に上体を持ち上げて立ち塞がった。

「ガッ、ググ……」

鋼龍が見たのは、その鱗と同様に金色に輝く、冷徹な目。

その片足が持ち上げられると、鋼龍の頭を鷲掴みにし、持ち上げ、思い切り踏みつけた。

ゴシヤツ！

「イ、ア、ッ!?!」

その鉤爪にも毒はある。思い切り握られ、叩きつけられた勢いで顎を貫かれ、脳天から頭蓋に差し込まれ、背筋から食い込まれ。

視界すらもぼやけていく。

そして、金火竜は再び足を持ち上げた。

ベギッ！

鋼龍の角が砕けて、からからと転がっていく。

グチャツ!!

鼻が潰れて赤い血がたつぷりと吐き出される。

ドギヤツ!!

その蒼い目玉が潰れて中の液体が血と共に垂れていく。

「グルル……」

それでも金火竜はこの鋼龍に対して憂さ晴らしをするように、その息の根が止まろうとも、暫くその頭を踏み砕き続けた。

「……………」

襲いかかって来た爆鱗竜の爆鱗の雨をひらりひらりと造作もなく躲しながら、その後へと容易く到達した銀火竜。

逃げる暇も与えず、その頭を驚掴みにして地に叩き伏せる。

「ゴウツ!?!」

上空に舞い戻り、強くブレスを溜めるその姿。

炎などこの俺には効かないぞ、馬鹿め、と起き上がりつつ思っていると、その口の中から見える炎は、どうしてか青い色をしていた。

頭の中で疑問と、そしてそれ以上の警告が鳴り響いた時には、ブレスは眼前まで届い

か、再び空へと飛び上がると、その青い炎のブレスを再び浴びせかける。

するともう、そこには、真つ黒な炭と、焦げついた染みしか残っていなかった。

「……………」

*

『倦怠期の夫婦つて怖いな』

「なんだいきなり」

久々に会ったと思つたらいきなり何を言うんだこのリア充スレイヤーは。

『金銀火竜が塔に現れたと聞いてな、腹立たしいと思いつながらも、古龍を凌ぐ強さを持つとも聞いていたしな。取り敢えずはと、我は様子を見に行つたのだ』

「うん」

『すると、別にイチャついてはいなかったのだがな、金火竜は憂さ晴らしに鋼龍を踏み潰しており、銀火竜は別の場所で爆鱗竜を憂さ晴らしに焼き尽くしていた』

「わお…………」

『イライラしながらもな、互いの事を想っているその姿がとても我の気に触れてな。』

だが、襲い掛かれれば一匹でも拮抗する上に、時間を掛ければもう一匹も合流するのが目に見えてな。

そうなれば我と言えど勝ち目は無い。

そうしてやりきれない思いを抱えながら帰って来たのだ』

『……はあ』

帰って来たのだ、って。

「それで？ ムカつくから共に殺しに行こうってのには行かないぞ俺は」

『えっ』

「いや、俺は別に素材目的とかで竜とか古龍とかに喧嘩吹っかけるほど喧嘩好きじゃないし……それに、既に出てくる幸せを自分から壊しに行くほど……野暮でもないの」
落ちぶれてないって言ったら流石に不味い。

『……そうか』

露骨にしよんぼりしやがって。

『では、我はどうすれば？』

「ええ……それ、俺に聞く？」

前にも似たような事言わなかったっけ。なんか別の趣味見つけろとかそういう事

さあ」

『……考えておく』

そうして去っていった。

……何だったんだアイツ。

*

とは言え、諦め切れるものではない。

この怒りを、この憎しみを、捨てろと言うのか？

いや……分かつてはいる。分かつては。

このままこんな事を続けたところで、我はその内、子種も何も残せず死ぬだけだ。けれど、それでも、我にはこれしかないのだ。もう季節がどれだけ巡ったか分からない程に、どれだけの番を食い千切つて来たのか分からない程に、我はそれだけをし続けて来たのだ。

我よりあの番が強いからと言って、それを諦めろと言うのか？

それなら……でも、死んだ方がマシだとは言えない。かと言って、我は、角も失っている。

我は他の同族にはない特別な力を手に入れた。けれど、それでも、子種を残す事はもう出来ないに等しいのだ。

なら、どうすれば良いのだ？

……結局、また塔にまで来てしまった。

至る所に金火竜と銀火竜の痕跡が残っている。炎が吐かれた痕跡も残っているが、両方の爪痕や臭いが残る場所では、それは手加減されたものだ。

どーせ、くだらない事で怒って、喧嘩して、そしてまた時が経てばイチャイチャするんだらうあいつらは。

ぶち殺したい。片方の首を掻っ切って、怒った方が突っ込んできた所を返り討ちに
して屍を重ねたい。

そんな事、今の我には出来ないのだが。
くそ……くそ。

この感情をどうすれば良い。策を弄してもあの金銀火竜を完全に分断する事など出
来ないだろう。

やっぱり諦めろと？ この感情をどうにかして収めろと？

………何か居る。

辺りを見回す。月が高く上っている。朽ちかけた柱が至る所に聳え立つこの地。

痕跡は金銀火竜のものしか無かったが、僅かに、ほんの僅かに金銀火竜以外の臭いが
する。

「……誰だ？」

「へえ………気付くんだ」

声だけが聞こえた。その方を振り向くと、先程までは何も居なかった柱の上に、迅竜
が居た。

通常とは違う、白い毛皮。

こいつ……かなりやる。

「君、この前も来てたよね。憎たらしい目線をあの夫婦に向けて。何か許せない事でもある訳？」

「……夫婦でいる事が気に食わない」

「……え？」

「倦怠期だろうと何だろうと、番でイチャイチャしてるのが我にとっては気に食わないんだよ！」

「……それだけ？」

何だその呆気に取られた顔は！

「貴様だつて番が居ないなら少しは分かるだろうが！ 貴様からも雌の臭いなぞ全くしないからな！」

「いや、全然。誰かと番になるとか面倒臭いじゃん」

「……………は？ いや、いや、貴様、何を言ってる？」

「縄張りを持つて、番と好き勝手する子供を外敵から丁寧に守つて、飯もきちんと与えてとか、ある程度育つたら狩りの仕方を教えてとか、面倒臭くない？」

思い出すとさあ、よくも僕の両親はあんな面倒臭い事やってたよ。感謝はしてるけ

ど、僕には無理だね」

こいつの言っている事が理解出来ない。

「別に迅竜なんてどこにでも居るんだし、僕一匹が好き勝手に生きたところでどうって事もないし。」

それなら好き勝手に生きた方がお得だからね。

責任を持って、番と子供を守るとか、そんな事より楽しい事は沢山溢れてるし」

「……楽しい事、とは？」

「そりゃあ、美味しいもの食べたり、まだ行った事のないような場所に訪れてみたり。」

こうやって便利な体も持つてるし、人にちよつかいかけたりも時々してるよ」

そう言うのと、一気に姿を眩ませた。

あの霞龍と同等程に見えなくなっている。

「……それで、貴様は満足なのか？」

「うん。他の竜とかに言っても納得してくれる事少ないけどね。僕は満足してるよ」

「……………貴様、人間臭いんだな」

「それは良く言われる」

あの狩人が、我でも見て分かる程に雌に惹かれなさそうな雰囲気をしているのに、どうして我のようになっていないのか。

少しだけ分かった気がする。

*

『我は、少し旅をする事にしようと思う』

「何だ唐突に」

昨日までののが嘘みたいのに、怨虎竜っぽくない落ち着いた雰囲気を出してしまつてさあ。

モテそうじゃないか、クソが。

『親元を早くに離れてから、我の中にはずつと恨みや妬みといったものが渦巻いていた。漸く、それを客観的に見れるようになった気がしてな』

「……はあ」

おいおい、何があつたんだこいつ。

『滾らせ続けていた鬼火も収めて、ゆっくりした時間で己を見返したいと思つたのだ』

「………そうか」

『貴様も来るか？ 貴様にもそういう時間が必要かもしれないぞ』

「……かもしれないけどなあ。俺達は、そう簡単に生まれ育つた場所とかそういうものを放つて好きには出来ないんだよ」

『だろ？』

何だよ、その分かっていったような言葉は。

『それじゃあな。我は東に行く。気が向いたら追って来い』

「……………へいへい、行つてら」

帰つて来なくて良いぞ、とまでは言う気にはなれなかった。

そしてとても気軽な足取りですぐに姿が見えなくなってしまうのを見届けると、どうにも取り残された気分が拭えなくて。

「……………付いて行けば良かったかなあ」

石を蹴つても、そのモヤモヤとした感情は晴れなかった。

マガマガくんは王様と一緒に猛き炎を探すようです

強さというものに悩んだ事が余りなかった。

才能というものなのだろうが、ふとした時にその理由を考えると、暫しそれに悩む時間が出来た。

己が他の同族や竜、古龍と比べても何が優っているのか？ 何故、己は他の同族が苦戦する古龍ですらもあつさり屠れるのか？

答えとしては、己自身の肉体と世界のの繋がりを生まれながらに鋭く感じられているからだ、というところに落ち着いた。

風のざわめきとそれが運んでくる臭い。大小様々な生き物達の営みが発する様々な信号。それらを己は生まれながらにして深くにまで感じる事が出来ていたようだった。

闇夜でも鬼火を出さずにいつもと変わらず行動出来るのは、同族の中でも己だけだった。

雨風が激しくとも獲物の場所を晴天の時と変わらず察せられるのは、より嗅覚の鋭いような竜ですら出来ない事だった。

突き刺す刃尾を常に急所に突き立てているのは己くらいのもだった。

外敵を見た時に、どの位の力で叩いたり突き刺したりすれば致命傷になるのか事細かに分かるのも己だけだった。

老いて尚、豊富な戦闘経験を以って広大な縄張りを保ち続けている雷狼竜が居る。

観察眼が鋭く、今も尚技量だけは成長し続けている童貞狩人が居る。

そういう奴等は下手な古龍より強い……が、それでも己には届かない。

己のような才能を持った他者に、己は今まで会った事がなかった。

多少寂しさのようなものを覚える事もなくなかったが、会う事があれば、己の築いてきた安寧が全て根底から揺るがされる事となると思うと、別に会わなくても良い……と思っていたのだが。

同じような才能を持つ、しかも古龍に会ってしまった。

*

「ここ辺りは羽虫が少ないな」

青い翼を持つ、キュリアを持たないメル・ゼナ。

ここらで通じる竜の言葉を流暢に使いながら、まるで警戒心の欠片もなく話しかけてきた。

ただ歩くだけでも洗練されたような身の振る舞い。

「羽虫？ キュリアの事か？」

「そんな名など付けるな。あの愚鈍で怠惰で臆病で地中から這い出る事しか趣味のない太陽から見放された糞な奴の配下になど、名を付ける事すら許したくない」

「……そうか」

会話をしながらも、腰が引ける。

こんな事など初めてだ。同じ才能を持つ者同士、そこにあるのは単純な種族差。

同じ才能を持つからこそ、分かっってしまう。

……こいつには絶対に勝てない。

後ろに下がろうとする足を必死に抑えつつ、聞く。

「あんたは、そういう羽虫を侍らせる事が出来るんじゃないか？」

「確かに。我等はただの竜や古龍よりも意志を保ったまま扱えるだろうがな。それでも、あの羽虫は我等の糞尿より下に居るしかない能無しにしか忠誠を誓わん。

ツケは来る。

それで、ここらの縄張りは貴様のものらしいが、その羽虫を退治してくれているのか？」

「居たところで悪影響しかないからな。見つけたのは潰している」

「それは助かる」

頭を下げられた。

「お、おい。やめてくれ！」

強い奴に頭を下げられるのは、ムズムズして敵わん！」

「何。あの肉体だけは肥えている青白に好きにさせていないだけで、我にとつては強く感謝するに値する」

……古龍なのにごここまで謙虚な奴も初めてだ。

「それと、聞いて良いか？ その人間がガイアデルム……」

その名を出した途端不機嫌な顔になった。

「その青白とやらは、人間達に討伐されたと聞いているが、その口ぶり……もしかして複数居たりするののか？」

「当然だろう。アレは太陽から見放され、地の下に追放されたと言えど、個ではない。種だ。地の下にはアレの卵があるだろうよ。」

……我でも、そんな地中に向かう程の蛮勇は持ち合わせていないのでね。真に歯痒いが、対処療法しか出来ない訳だ」

「そうか……」

キュリアは少なくなってきたものの、アレとは一生付き合っていかなきゃいけないのか。クソ面倒だな。

「それと、一つ聞いて良いか？」

「何だ？」

「何故、ここに？」

「それは勿論、私の縄張りだからだ」

「……………は？」

「いや、少し異なるかね。あの羽虫の出るところ全ての統治。それが王たる私の務めだ」

「……………」

「貴様は我にとても良く似ている。貴様が複数居たとしたら、流石に我も真っ向からでは敵わないだろう。その位の力はある。」

「何故そんな力を持つて生まれたか、考えた事は無いか？」

「あると言えばあるが。そこまで博愛精神を持つている訳でもないものでね。」

「美味しい肉を食つて、良い嫁と共に過ごして、子を残せば己は満足だ」

「つまらない生き方だな、貴様は」

「……………身の程を弁えていると言つてくれ。」

「縄張りと言うには、あんたと会つたのは初めてだが？ 放置し過ぎではないのか？」

「ここらの人間は優秀なのでな。特にある人間は、羽虫に自我をも犯された我が同胞や古龍、更にはあの羽虫を侍らせるしか能のない古龍の面汚しから災厄級の古龍までも退

けたと聞く。

久しくここらに來たのは、別場所の羽虫も数を減らしてきたのでな、それら全てを成し遂げた一人の人間を見に來たのだ」

……あー……。

「残念ながら、そいつ、もう居ないんだよな。童貞である事に発狂して失踪した」

「……何て？」

そんな事言われたら、古龍と言えど流星に顔も崩れるよな。

*

発端はな、己の弟なんだ。

まあ、何だ。聞いてくれよ。

あんた、ここらも含めて広く生きてるなら己の種族の事も結構知っているよな？

己達にとつて、この頭から生える角が一番異性に対する強さを示す部分になる。己達に刻まれた本能つてものでな、角が欠けた雄はもう雌に見向きされない。

己の弟は早い頃に角が欠けてしまつてな、だがそれでも意地汚く生き続けて、強くなり続けて、己ほどではないが、同族の中では随一の力を手に入れた。

そしてその狩人も雌に全くと言って良いほどモチなくてな。弟と狩人は初っ端会つたところから意気投合した訳だ。

だが、何があつたのか己は知らないが、雌に受け入れられないという恨みばかりを生きる糧にしていた己の弟はある時ぴつたりとそんな悪感情を捨て去って、そうしたら好きの雌の目に止まって、めでたく番も出来た訳だ。

それを見た、その人間はな。災厄級の古龍も退ける程に強いのに関わらず、まーつたく雌にモテなく、その雄の象徴を自らの手で扱く事でしか発散してこなかったその人間はな。

弟の言うところによると……人間とは思えない奇声を、ティガレックスかと思う程の音量で発しながらどこかへと消えていったんだと。

「な、なんと……」

「己も、その人間とは多少の親交があつて馬鹿にしていたところはあつたのだが……流石に申し訳なくなつてな。」

だが、人里にも居ないようだし、かと言ってどこかで見かけたような話も遠方まで足を伸ばせばと聞かないしで。

多分……もう死んでいる」

「確かに、死んでいる可能性の方が高いだろう。」

だが、実際に死体が見つかったような噂も聞かないのだろうか？ 人間の死体は人里から遠ければ遠い程噂になるものだからな。

それこそ、あの緑色の悪食にでも装備ごと食われたり、壁に張り付く白い目無しにでも丸呑みにされない限りは、な」

白い目無しはフルフルの事だろうが、緑色の悪食？

「それはそうだが……」

「我と探しに行かぬか？ 貴様とは性が合いそうだ」

「……断つたら？」

「理由でもあるのか？」

「子育て中なんだが」

「ふむ、成程。そう言えば、ここらには貴様と同等な雷狼が居たはずだが。貴様からも僅かにかの者の臭いがする。

未だ健在なのだろう？ 何、奴には我に借りがある。快く引き受けてくれるだろうよ。」

それ以外に理由はあるか？」

「……………いや」

……………番と子供の安全が保障されただけでも良しとするか……………。

*

あの狩人が発狂したのは城塞都市。

やって来れば、あのガイアデルムが出てきた大穴が近いからか、まだキュリアがぼちぼちと居る。

「折角だ。駆除していくぞ」

「……分かったよ」

己の縄張りではないんだが。

今まで見てきたメル・ゼナよりも頑丈そうな肉体を持っていると思っていたが、きつとこれがキュリアに生命力を奪われる前の元々なのだろう。

バルファルクのように翼の先端までをも使う攻撃は更に間合いが広く、連撃の多彩さも上回る。

そして己より中々に図体が大きいのに、その両の翼と尾の一つ一つの動作でキュリアの数を確実に減らしていくものだから、己のように鬼火で身を守る必要すらない。

「どうした？ 我に見惚れたか？」

「……あんたが羽虫の力を利用するなら、もう災厄を軽々越しそうだな」

「使わないとは言っていないぞ？」

「え」

「あの肥溜めの下こそ相応しい糞には……肥溜めは分かるか？ 人間が植物をより良く育てる為に糞尿を貯めている場所だ。」

そう、あの肥溜めの下にこそ相応しい糞と対峙する時は、流石に糞から湧き出る多量の蛆虫を全て潰せる訳でもないのだな。

慣れる位はしているに決まっているだろう」

「……どうなるんだ？」

「貴様を何もさせずに屠る事が出来ると断言しよう」

誇張など一切入らない、ただの事実としての言葉。

「……己が何体居ればあんたに並べる？」

そう聞くと、じつと己を見つめてきて。

「ふむ。三、いや、四……五もいくかもな」

淡々と述べられる言葉。

同じ才能を持つ者同士、それがやはり事実であるという事を否定出来ない。

信じたくないが。

「それ程言うのなら、一度見せてくれても良いんじゃないか？」

「狩人を見つけたのならば、軽く見せてやろう。何せ、疲れるのだな」

疲れるだけで済むのか。

「そういえば、貴様の弟はどこに居る？」

「知らん。仲の悪い訳じゃないが、良い訳でもない」

己が弄り尽くしたせいだが。

「それは残念だ」

一方的にライバル視されているという旧知のイヴェルカーナと出会って、一方的に叩きのめした後、気絶しているそいつからたつぷりと血を頂いていた。

「血を飲むのは変わらないんだな」

「骨を噛み砕くよりはよっぽど美味い」

馬鹿にしてんのか。

その気絶したままのイヴェルカーナを引きずって目立たない場所に移動させる。

「それに、生かしておけば何度でも頂ける」

……それは少し唆られるな。

「やめとけ。貴様の牙ではずたずたに引き裂いてしまうからな。そこから腐り果てて悪戯に苦しませるだけだ」

やっぱり馬鹿にしてるだろ。

傀儡化したリオレウスを見つけた。見るからに異質な色に染まっており、正気はとうに失っているどころか、きつともう数日も生きられないであろう事はつきり分かる。

そして、それだけ圧縮された力を振るうであろう事も。

それと同時に背筋が凍った。

そのリオレウスに対してではなく、隣のメル・ゼナから溢れる怒りに。

「グギヤアアアツ、グツ!？」

襲いかかってきたリオレウスに対し、造作もなくその三叉尾で首を掴み、持ち上げる。

……いや、掴んでない。喉の奥深くまで突き刺さっている。

「ヒューツ……………、グ、ガ……………」

メル・ゼナはそのリオレウスの頭を自らの顔の間近まで持つていき、少しばかりの間眺めた。

ドス黒い血が三叉尾から伝って流れていく。

「誰かに伝える事は？」

「グ……………ギイ……………」

聞くものの、リオレウスは全く力の入らなくなった肉体をそれでも動かそうと呻くばかりで。

メル・ゼナは翼の鉤爪で首を切り裂いて、殺した。

そして宿主の失ったキュリアが早速寄生して来ようとするのに対し、前足を持ち上げると一気に数匹を踏み潰し、すり潰す。

「……………我の父はな、我以上に王として、竜から人から、そして古龍からも慕われていた。だが、唐突に地底から現れたあの日影者が全てを壊したのだ。」

矢面に立った父は、それに連なった古龍達は、どれもが発狂して帰って来た。慕われていた全てに牙を剥き、何もかもが破壊された」

「あんた、その時代を取り戻したいんだろ」

王としての責務とかではなくて。

「否定はしない。ただ、我が幾ら何をしようとして、その時代はもう来ない事も承知している。」

私の種族は、寄生され過ぎた。本来の私の姿よりも、寄生された我等の方が多くなつてしまった程に。

取り戻すには、我等は暴虐を働き過ぎた」

己からすれば随分と生温く贅沢な悩みだな、とも思うが。

ただ……己も人を飼っている身であるからか、少しばかり共感する部分もなくはなかった。

散らばるキュリアを潰しながらやや湿った場所に来る。

濡れるのは好きじゃないんだがな。

ルドロスの数匹が己達を見て逃げていったんだが……あの狩人の臭いがしたような。

「……………」

ルドロスの居た場所まで歩く。臭いを嗅ぐと。

「何か見つけたか？」

「……いや、いやいや。いやいやいやいや」

一応、己はあの狩人を買っていた部分もある。

災厄級の古龍をあの前狼竜の手助けもありつつ討伐したというところで、もしかしたらとつくに己にも牙を届かせられる領域まで来ているのかもしれない、と若干ながら考えていた時もあった。

それが、もしや、まさか。

「何だ？」

「……頼みがある。ロアルドロスが居ないか探してみてくれないか？」

己は……見たくない」

「……？ 何を想像したと言うのだ？」

「言いたくない」

それだけ言うと、メル・ゼナは不承不承ながらも動いてくれた。

「己も……話を聞ける奴が居れば聞いてみたいが」

随分と離れてしまったから、こっちの、特に己の言葉など聞いてくれる奴など居そうにないが。

*

帰路につく。

「……あの人間は、立ち直ると思うか？」

「立ち直るも何も。あいつにとつて今が幸せなら、立ち直る必要も無いだろう」

「……英雄に輝かしい未来があるとも限らないのだな」

己は、狩人を見ていない。だが、初対面のメル・ゼナが衝撃を受ける程に、その狩人は……狩人らしくなかったのだろう。

それと。

「あんたは、物事を上から見過ぎているのではないか？ 己は強いと自覚しているが、出来る事はそれでも限られている。古龍のような不思議な能力も持ち合わせていない。空を跳ぶ事こそ出来るが、骨まで食らって溜め込んだ活力を派手に使っているだけに過ぎない。

あんたのしている世界と誰しもが同じ世界を見ていると、どこか無意識に信じてしまっているだろう」

「……肝に銘じよう」

ルドロスには狩人の臭いがこびりついてた。

ロアルドロスの遺体があった。こんな湿地で腐り果て既に臭いも失せているその遺体には、アンジャンフのような強い顎に噛まれたような跡があった。

近くにはそのアンジヤナフの遺体もあった。狩人が得意とするガンランスで仕留められた跡があった。

分かったのはそれだけ。

どういう過程を経て、どうなったのか。考えたくもなかった。

見たものを未だ信じられないように、メル・ゼナは空を見上げる。

「……………」

「そつとしておいてやれよ?」

「それにしても、アレは我にとつて…………我にとつては、幸福には思えない。

……………すまない。力を見せると言ったが、そういう気分ではない。

一度帰らせてもらおう」

そう言うのと、逃げるように飛んでいった。

……………あんな古龍を愕然とさせるなんて、早々無いよな。

*

*

十分に育った子を縄張りから追い出し、番とも一度別れ、ふと気付けばまたあの狩人の元へと向かっていた。

あれから季節が二つ巡っている。

今でもあの場所で、そういう事をしているのか、それとも。

時折気になりつつも、何せ遠い場所だから子育ての間は行く機会もなく。

とはいえ、気になり続けてたとえど、そこまで気乗りのする事でもなく。

ゆつくりと数日掛けてその湿地まで辿り着く。

少し離れた場所に、あのメル・ゼナが居た。

「……久しいな」

「何かしたのか？」

「いや。色々考えたが、何も。時々見に来ていただけだ」

「変化はあったか？」

「……………」

やはり、幾ら群れを守る力があるうと、子を作れないのでは意味がないのだろうか。

大半が程なくして去り、今は老いて子を作る力もなくなっているルドロスが死んで、

一人になったところだった」

「……それから狩人は？」

「ずっと洞穴に引き籠もっている。外に出ていない。

そういえば、最後に見てから三日程経つか」

「……………見に行くぞ」

マガマガくんは猛き炎に腹が立つようです

時折カムラの里にやってくるその商人は、どこからやってくるのかも分からない割には、質の良い商品を安値で卸してくれる事で来る度に話題になる。

また、やって来た後には近辺で僅かながらマガイマガドの痕跡が発見される事もあり、マガイマガドと暮らしているとの噂も立っているが、当の商人は自らの事に関してのはのらりくらりとほぐらかすばかりで、それが更に噂を呼ぶ形になっていた。

聞かれた事が凶星であれば、そのマガイマガドと共に生きる商人にとつて虚実を使い分ける事などは慣れたもので、失踪した猛き炎の行き先を聞かれても、知りながらも何もそれを口に出す事は無かったのであった。

*

二匹の子供を育て終えた事で番とも別れたマガイマガドは、その代わりに飼っている人間の数が二人に増えていた。

気紛れから助けた商人と、それから生きる氣力を失った猛き炎。

それと原初を刻むメル・ゼナが何故かずっと居候している。

何でこんな事になったのだから、と不満に思うばかりではあるが、そうでなければ退屈

を持って余しているであろう事も過去の経験から理解しているのもあって、余りその感情を表に出す事はない。

ついでに言うとう、表に出したところでそのメル・ゼナには口や遊戯では勝てても、実力行使をされてしまえば何も敵わないと分かっているのもあった。

商人を乗せて帰ってくると、メル・ゼナが出迎える。

「私の鱗は売れたか？」

商人が返す。

「ええ、まあ。言つた通り、一枚だけなら偶然拾つたとしても言い訳つきですけど、二枚目以降は流石に無理ですからね？」

「仕方ないな」

そう言いながら、尻尾でひよいと籠を漁つて、目当てのものを取り出す。

人と共に暮らした期間があつたからか、人の文化にも聡いこのメル・ゼナは人の食物を嗜めるとなると、マガイマガド以上に欲して来た。

取り出したのは匂いの強い、発酵させた食物。

「ああ、これだ。この匂いだ。腐敗させるのとは違う、この匂い。たまらんな。ほれ、貴様も食え」

そう言うとう、ぼんやりと空を見つめるだけの猛き炎の口をこじ開け、食物を押し込み、

水で胃へと押し込んだ。

猛き炎は、言葉を口に出す事はおろか、自分で物を食べる事も、動く事すら殆どなかった。

鍛え上げられた肉体はもう見る影もなく、肋骨も浮き出る程に痩せ細っているばかり。

明らかに死にたがっている猛き炎を今も尚生かしているのは、何の縁もないこのメル・ゼナである。

元々はロアルドロスのものであった巣穴の中で、ルドロス達から見放され、ただ一人仰向けになっていた猛き炎。

マガイマガドとメル・ゼナがその中を覗き込むと、猛き炎はゆっくりと立ち上がり、そしてガンランスを構えて襲いかかって来た。

殺意はあったが、敵意はなかった。口には出さずとも殺してくれと懇願していた。自殺までは出来なかつたのだろう。それを見て、メル・ゼナはその猛き炎を拘束して、そして持ち帰った。

……。

猛き炎を生かし続けるメル・ゼナを見て思う事は多々あったが、マガイマガドがそれを口に出す事はない。

介抱をする商人も置いておいて、マガイマガドはその場を離れた。

後から、メル・ゼナがマガイマガドを追いかけるように歩いて来た。

「我はな、人のことを知っているように知らなんだ。人と暮らしている時間もあつたとはいえ、人の本質を理解する前に災厄が起きた。その後は人と交流する事など、一度たりともなかった。

ここに来るまで我はな、復讐以外の目的の事など基本何もして来なかったのだ。

我はな……猛き炎と会う事を、とても期待していたのだ」

「それじゃあ、何だ。あんたは要するに、あいつと戦いたかつたとしても言うのか?」
「そうだな」

「直近だとうだかは分からんが、それでも己と同等位でしかないぞ」

「命のやり取りをしたいと言っている訳ではない。戦いを通じて人の英雄というものを理解したかつたのだ」

「それを今でも諦められていない、と」

「そうだな。だが……貴様のように思うところもある」

メル・ゼナは空を見上げて、暫く黙つた後。

「……………貴様が彼奴をどうしようとも、我は何も言わん。

ただ、それだけだ」

「……そうか」

*

夜になった。

商人が焚き火を囲んで、猛き炎の隣に居る。

マガイマガドは、言った。

「お前、正気までは失っていないだろう」

商人はその言葉に驚きはしなかった。

人であれ、竜であれ、何であれ。生き物が狂うには、それ相応の要因が存在する。

人の話の中には、自尊心満たせなかった人間が狂った末に竜へと堕ちるといふ話があった。マガイマガドがそれを聞いた時、文字通り腹を抱えて笑ったものだった。

狂うと言うのは、そんな下らない事柄で出来るものではない。もしそんな事柄で狂えるのならば、そもそもその人間が自己愛に元々狂っていただけの事だ。

狂うと言うのは、自らの内側だけの事柄で出来るものではない。自らの外側から与えられた出来事が、心の許容範囲を大幅に超えてこそ起きてしまうものだ。

猛き炎は自己愛に狂っている人間ではない。報われなかったとはいえ、他者の為に災厄そのものにまで牙を向けて、そして偉業を成し遂げて来た、人という群れの為に自らを捧げられる人間だ。

猛き炎が外側から与えられた出来事は、猛き炎の心が砕かれる程の事ではない。もしそこまで愛に飢えていたのなら、愛というものに執着して離したくなかったのであれば。あの場所のルドロスは猛き炎の傍から離れる事を許されていなかっただろう。最後まで猛き炎の傍に居た、生殖能力を失ったルドロスをきっちり弔う事など出来ていない。

猛き炎は何も答えなかった。

だが、マガイマガドにも、商人にも。そしてきつと、メル・ゼナにも。分かっていた。深く心に傷付いているのは事実だろうとは言え、今の猛き炎は狂っている訳でも、そしてまた躁鬱になっている訳でもなく、何もしない事を選んでいるだけだ。元々あった強靱な精神力でそれをひたすらに続けているだけだ。

言ってしまう。猛き炎は駄々を捏ねているだけだ。今の状況に甘えているだけだ。

マガイマガドにとつて猛き炎をこんな状態にまで追い込んだ元凶は己にあるとも分かつてはいて、申し訳なさを感じている部分も当初はあつたが。

こんな事を続ける猛き炎を見て、今となつてはもうそんな感情などない。呆れと、怒り。そして殺意。

ただ、だからこそ。マガイマガドは猛き炎をそのまま殺すのにも強く嫌悪感を抱いていた。

猛き炎を雑に啜えて、マガイマガドは川へと向かう。

「……………」

牙が食い込んだ脇腹から血が染み出してくる。その味は何ともまあ、味気ないものだった。

猛き炎は痛みからか僅かに身じろぎするが、やはり何も口に出す事はなく。

そして、川へとぽいと投げ捨てられた。

ばしゃん。

ぷかりと浮かび、そしてそのまま夜の川を流れていく。

……暇ではなかったが、それ以上に下らない時間だったな。

心底詰まらない顔をしながら振り返ると、メル・ゼナがまたやって来ている。

「文句は無いだろ?」

「……………そう、だな」

「どうせあいつは自殺なんで出来ねえんだから、運が悪くなきゃどつかで生き続けるだろうよ」

メル・ゼナもまた、ほとほと疲れたように溜息を吐いた。

「遊戯でもしようか。我にしては珍しく、打ちのめされたい気分だ」

「……………こてんぱんにしてやろう」